「日本文化と女性」（近世・江戸篇）を考える

平成26年10月21日　福留温子

※動画内で言及しているページ数と本レジュメのページ数が一致していない場合があります。

近世　近松門左衛門・井原西鶴

中世戦乱の世が終わる

徳川幕府…約二百五十年間、ほとんど戦乱がない

中央集権政府（社会的秩序）

身分制度（士農工商）人間の評価・序列　命令と服従の人間関係

儒教道徳…君臣の義＝忠義、父子＝親孝行、夫婦＝夫唱婦随（妻は夫に随う）、長幼の序＝長男優先

封建制　…平安時代より徹底し、町民まで

将軍・徳川幕府→藩→藩士　武士→農工商　家長→長男→次男以下　夫→妻

家（お家断絶）

「三従七去」　和俗童子訓（貝原益軒）

三従　…夫人には三従の道あり。凡夫人は、柔和にして人に従がふを道とす。我が心に任せて行ふべからず。故に三従の道と云ふことあり。是亦女子に教ふべし。父の家に在りては父に従ひ、夫の家にゆきては夫に従ひ、夫死しては子に従ふを三従と云ふ。三のしたがふなり。

七去　…人に七去とて、悪しき事七あり。ひとつにても有れば、夫より逐ひ去らるる理なり。故に是を七去と云ふ。これ古の法なり。女子に教へきかすべし。一には父母に随はざるを去る。二に子なければ去る。三に淫らなれば去る。四に妬めば去る。五に悪疾あれば去る。六に多言なれば去る。七に竊盗（ぬすみ）すれば去る。此の七の内、子なきは生まれつきなり、悪疾はやまひなり。此二は、天命にて力に及ばざる事なれば、婦のとがにあらず、其余の五は、皆我が心より出づるとがなれば、慎みて其悪を止め、善に移りて、夫にさられざるやうに用心すべし。

（『益軒十訓』東京至誠堂　明治四十四年　国会図書館）

身分違いの恋愛・結婚は禁止

武家諸法度…武士の結婚は世継ぎをもうけるため

国主、城主、一万国以上ならびに近習 物頭（ものがしら）ハ、私ニ婚姻ヲ結ブベカラザル事

妻敵討（めがたきうち）　参勤交代

町人社会でも主（女）・従（男）の結婚は難しかった（お夏・清十郎）

町人階級が力を持つ　下男下女の結婚は自由

廓

元和元（一六一五）年　元吉原（私娼を必要悪として黙認し娼婦を収容）

寛永十七（一六四〇）年　京都島原

寛永八（一六三一）年　大阪新町

貨幣経済

銀の産出・流通　…秋田、新潟・佐渡、石見・能登、越中 但馬・生野

貨幣鋳造…大判・小判・丁銀・豆板銀

銀貨

貨幣経済の隆盛

商売繁盛・商品市場の発展

食品・着物・装飾品

浮世絵（歌麿・写楽・北斎）絵画美術（宗達・本阿弥光悦・尾形光琳）美術工芸品

俳諧連歌・浮世草子・古典の出版物、浄瑠璃・歌舞伎

識字率拡大→　町人文学が生まれる（新興町人文学＝ヒューマニズム、大衆文芸、娯楽文学、庶民的）

印刷の普及→　出版　版本の隆盛

粋（すい）　…誰しもが着飾り、見栄を張り、文化を享受する

庶民の消費活動の活発化→　商品取引の増大

金山・銀山の産出が衰退→　信用手形、預手形。振出手形などが使用されるようになる

遊廓

親元出し・突だし　／　二十七歳年期・身請け

太夫・天神・かこい

井原西鶴

寛永十九（一六四二）年～元禄六（一六九三）年。町人。

本名・平山藤五。西山宗因に入門し談林派の俳諧師として活躍。

生玉寺内で一日一夜四千句の独吟。

貞享元年（一六八四）一日一夜二万三千五百句の独吟、二万翁と呼ばれる。

好色物：　『好色一代男』『好色一代女』『好色五人女』

武家物：　『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』

町人物：　『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』

『好色一代男』（一六八二）

世之介・交際した女性は三千七百四十二人、男性は七百二十五人

『好色五人女』

巻一「姿姫路清十郎物語」お夏・清十郎

巻三「中段に見る暦屋物語」おさん（今小町）、大経師と結婚　手代茂右衛門　腰元りん

石山・琵琶湖・丹波で隠れて暮らす。見つかり処刑される

巻四「恋草からげし八百屋物語」お七・吉三郎

現実的・享楽的

町人の人間性の解放　／　一般女性の恋愛の問題（遊廓を含む）　／　経済の種々相　（貨幣経済）

『西鶴織留』（現代語訳）

■　五日帰りにおふくろの異見（持参銀　金銭問題）

今どきの縁談は、①仲人が持参金の十分の一を取るのだから、たいていは騙り半分である。娘の親のほうは、嘘をつくにしたところで、二十二、三歳までも、振袖を着せておいて、十七だの十八だのと本当の年齢を隠す程度で、べつに大したことではない。ところが男のほうで嘘をいうとなると、②結納の絹・巻物、包み銀も当座借りで間に合わせ、婚礼が済み、持参銀を請け取ると、右から左へ、きつく催促されている手形借りの返済に回し、もう五日帰りから、すべてにがた落ちになり、仲居・御物師も、今日までの約束ですと、祝儀の少ないのに不平をこぼし、嫁さんの乗り物が実家に帰る前に、さっさと帰ってしまう。嫁の実家への土産物にと、菓子屋へ杉重箱入りの菓子を買いにやると、菓子屋のほうでは、「前々からの代銀がたくさんたまっていますので、またこの上、掛売りはできません」と断わられる。魚屋からは、店にある鯛を、無いといってよこさない。やっとのことで、紙屋をうまく丸めこみ、すべての相手に杉原紙を進上物として、嫁を里帰りさせると、嫁入りに付き添ってきた介添女・乳母たちは、帰る早々、婿方の不都合を一つ一つ母親に告げて、「まだ足下の明るいうちに、御思案なされて、嫁入り荷物を取り返しなされたら」と、進言する。しかし、女の身の悲しさはこの点にある。すなわち、③いったん嫁入りしたら、もう離婚の自由はない。世間体もよくないので、何事も表沙汰にしないで、娘をもどすおりに、「④持参金のことはもうしかたがない。着物や手道具を貸せと言われて、それを質に置かれては、取りもどすことができない。何事も、『お母さんに相談しなければなりません』と答えて、小袖一つも貸してはいけない。もし姑がつらく当たったら、⑤こちらへ里帰りするたびごとに、二枚なり三枚なり、鹿子の着物を、こっそり風呂敷に包ませ、何度も持ち帰って、長持ちをすっかりからにして、離縁を申し出るつもりで、身の回りの整理をするがよいぞ。ぐずぐずしているうちに妊娠するとめんどうなことになる。⑥子のない時に外の男と再婚したのがよい。⑦夫にあきられる仕方は、朝寝して髪を結わず、気疲れで眩暈がするといって、昼でも高枕で寝て、口をきかず、朔日・二十八日の式日にも、わざと不機嫌な顔付きをして見せ、膾・焼き物も口にあわないといって、せせり箸して、ろくに食べず、忙しい最中に、わざと汁粥を作らせ、一門付合いにも、阿呆形気と見られるようにふるまい、三日に一度ずつ、母様見舞いにといって里に帰れば、後々には、どんな夫でも、うんざりして、口喧嘩する時、『お気に入らぬ女房を、一日でも見ておられるのが悪い。さっぱりと埒があけられますのに、世界に女ひでりはあるまいし、お好みにかなった当世娘が、いくらでもございます。私が横太りで、なり格好が悪い点は、十貫目の敷銀と、今にも父様がなくなられたら、新地十間口の家、しかも河岸にあって、裏に貸蔵まで建ち続いているのを、遺産分配にもらえますが、この家と銀とで、辛抱してもらいます』と、言いたいほうだいに言いちらし、とどのつまりには、こちらから埒をあける気で、逆上したふりをして、黒髪の先を少し切って投げつけ、近所へ響き渡るほど泣き出し、人を集めて、そのまま帰って来なさい」と言う。

離婚届けを出せるのは夫のみ

三行半＝離婚届け・再婚許可書

女性も金銭で三行半を書いてもらったり、三行半を突き返したりもした。

嫁入道具：　妻に所有権　→　妻は、財産を勝手に処分されたら離婚できる。

持参金　：　妻が離婚を言い出した時は権利を失う。

■ **古帳よりは十八人口**（当時の経済事情）

近ごろは商いが不景気で困った困ったと、人ごとにこぼしている。が、これは大きな考え違いで、これでも昔に比べたら、全く商いが多くなっているのである。その証拠には、大阪の堺筋に、椀・膳・重箱など、いろいろな塗り物を売っている店があったが、その親の代の、A寛永年間の古帳面を出して見ると、年間の売上げ高が銀七貫目にもならないくらいである。この利潤で主人六人の口を糊して、各自に正月小袖を新調し、餅も世間並について、方々の勘定も、十二月二十五日から二十八日までの間に済ましてしまい、大晦日には忘年会だといって、ひまな年寄り連中を呼び集めて、小鴨の汁に鰤の焼き物といった料理でもてなし、酒の勢いで猥談などにうち興じ、少しも心配事がなく、一年の決済をされたが、B今の自分の代になっては、親仁の時よりは取引きもうんと増えて、毎年四十貫目余りの売上げがあり、人もその当事よりは増えて、家内十八人になったのだから、以前に比べて商い事が無いとはいえないはずであるが、年々手もとが苦しくなってきて、C両替屋から、小判を日借りしたり、期限二日の証文を入れて銀を借りたり、利息二割をもかまわずに、まず借り入れて、さし迫った支払いを片づけ…

■ **懐炉の成功**（「品玉とる種の松茸」　発明で大もうけした話）

…ところがある時、宵に焼いた鍋の下に、翌朝まで火が残っていたので、これは不思議だと、たきつけは何かと気をつけて見ると、茄子の木や犬蓼であった。これらを焼いて灰にすると火が消えにくいことを確かめて、これは人が知らない便利なことだと考えついて、手ぶらで江戸へ下って、銅細工の職人を相談相手にして、初めて懐炉というものを発明して、十二月ごろから売り出したところ、これは老人や楽隠居の養生にもなり、夜詰めの侍衆のためにも重宝で、しだいしだいに流行りだした。後には「御火鉢や煙草盆の火入れの長持灰」という看板を掲げ、うんと売りまくって、ほどなく大金持ちになり、日本橋通り町に両替店を出し、いったい何万両ぐらい蔵にはいっているのか、誰もわからない。

四条通の白粉屋の
店頭風景

店先には、編み笠を被った町人。その共をする、余情（よせい）、杖・草履・網笠を手に持った小者、塗笠を被り、抱え帯をしめ、大柄の下り藤の模様の着物の女房、尼、竹籠に鰤・鯛・蛸などを入れて、天秤棒で荷なった魚屋等の通行人が見える。

白粉屋の店頭には、はでな衣装の看板娘が坐り、衝立看板が置いてある。看板の横にあるのは白粉箱。柱の横に坐っているのは売子の女か。

上げ見世に置いてある凸形の看板は、胡粉塗にしたり、鶴や鷺を描いたりして、白い物という謎解き看板である。

当事は京都の白粉屋の屋号にも鶴屋または鷺屋と言うのがあった。また中高は鼻高で、美女の意であるから、この白粉を使えば美女になるの意の謎であろう。

■ **古帳よりは十八人口**（豊かな町人女性）

…の絹小袖に、繻珍の帯、それに紫色の皮足袋といったお洒落でしたよ。この家の奥さんのふだんの身なりといったら、ァ肌着にはいつも白小袖をつけ、ィ中着には鹿子絞り、上着には黒羽二重のひっ返しの小袖、それにゥ藤車の紋所を、碓ほどの大きさにして付けて、役者でも着そうな広袖仕立て。百品染めの白繻子の帯を、腰も見えなくなるほどに巻きつけ、ェ頭には、透き通った鼈甲製のさし櫛を銀二枚であつらえ、銀の笄に金紋をつけさせ、珊瑚樹の前髪押え、針金入りの七元結をしめ、素顔でさえ色が白いのに、ォ御所白粉を寒中の雪水でといて、二百遍も顔にすりつけ、手足に柚子の絞り汁をつけて荒れるのを防ぎ、ヵ置炬燵には流行りの紫蒲団をかけ、茶繻子の腰当て。キ延べ紙の鼻紙に、壺打ちの楊子を取り添え、ク煙草盆に伽羅香をたきかけ、煎じ茶を台に載せたケ天目茶碗で運ばせ、手もとにはコ『源氏物語』を置き、それをながめていたずら事に気を移すことを年中の仕事とし、サ春の花見・秋の紅葉見には駕籠で出かけ、芝居の替りごとに桟敷をとらせて、中居・腰元・裁縫師までひき連れて出かける。これでは諺にいうように、針を蔵に積み上げた大金持ちであっても、とてもたまったものではない。このような万事日ごろの暮らしの奢りから身代をつぶすものなのです。要するにお前の奥さんは、自分の夫だけに見せればよい姿を、遊女のごとく飾りたて、夫は夫で、一生連れ添う女に、無い物も有るような顔をして、内実の苦しさを隠し、ふだんの肌着に、緋紗綾の褌をしているなど、人がついぞ知らない無駄な失費です。傾城狂いするのなら、誰もが見栄や外聞を張るところだから、格好つけるのももっともだが、それでさえ近ごろは人が利口になってふだん着で通っても、遊興代さえちゃんと払ってくれれば、揚屋は喜ぶっていうじゃないか。

■　子をおもふ親仁（教育について）

町人でも、繁盛している家に、生まれてくる子は、前生から定まった幸福で、他とは全く違って、因縁が深いのである。Ａ本乳母・抱き乳母といって、二人まで、氏素姓までも吟味して、Ｂ年寄り分の手代を監督に付けて、かりそめにも小宿ばいりをさせず、笄・差し櫛をさせず、肌に絹物を着せて、Ｃ食物も、朝は白粥に飛魚・さごしのほかは、毎日献立を替え、Ｄ夜は枕元に寝ずの番をつけ、おしめのぬれる数を調べ、昼夜に三度の五香湯を使い、お出入りの医者は、絶えず回診され、その贅沢なことは、一つ一ついうまでもない、心立ての悪い者を、「馬追い・船頭・お乳の人」というけれども、金持ちの家では、万事この上もないほどに優遇するが、その代わりには、少しでも奉公に私があると、明日ともいわずに追い出されるのに恐れて、かりそめにも、すねたことを言わずに、若子様を大事にかけて、お育て申し上げるのである。

■　所は近江蚊屋女才覚（秀でた企業家の女性）

そもそも近江蚊屋の発祥地は、八幡の町から始まって諸国に広まったものである。その中でも①扇子屋というのは、もとは小さな②酒屋で、副業に米を売っていたが、おかみさんが才覚のある人で、弦掛升を自分で持って、米にしろ酒にしろ③わずか一升ずつ買っていくような貧乏人には、儲けなどかまわずたっぷり量ってやって、ちっともけちってはいませんよというところを見せた。ほどなく国じゅうにあの店はいいよという評判が広まって、近在近郷のほか山奥に住んでいる人たちまで、この町に立つ市に集まってきた人たちが、帰り道にこの家の二つの店口に群がり集まって、いろいろと買い調えて帰って行ったので、一日で銭の山や白銀の洞もできるほどもうかって、④にわか成金となった。後には、たいていの風邪などは、薬代わりに、ここで売っている上酒を飲んで直すくらいであった。その家が富貴になる時は、万事順調に、何の憂いもなく、風が吹いて心涼しくなるような感じのするもので、この扇子屋も家業が栄え、名が広まっていった。その後は⑤江州産の蚊屋布を高宮で買い取って、国々に出店を設けてそれを売らせ、ことに京都四条東の洞院に出した店では、毎年、高宮縞の布ばかりを、千駄（約四万貫）ずつも売り払った。また、⑥江州産の畳表の販売店を、大阪に出し、といった具合に、だんだんと大商人に成長していったのであった。それからは毎年、新工夫をこらした蚊屋が、どのくらいさばけたか計算できぬほど数多く売れていったが、これにつけても、世の中というものの、際限のない広さが思いやられるのである。⑦毎年蚊屋を縫う女が八十人余り、乳や縁を付ける女が五十人、それが台所の板敷の間に並んでいる有様は、まるで女護が島のようである。

■　一日暮しの中宿

世の中が暮らしにくくなった証拠には、本年の春の出替わりほど、女奉公人の余ったことはない。大女で大屋敷の台所働きに間に合う者は、ア給銀四十五匁から五十匁に決めて雇っていたのに、今年は四十匁を最高にして、しだいに下って、中の上で三十匁、または二十七、八匁、二十五匁までであって、それより下は二十二、三匁、十八匁、少し小作りな女は、機まで織って十五匁から銭一貫の給銀に、近江縞の帷子一つだけで雇えた。半年間の紅白粉代、あるいは草履銭は、自分持ちで奉公するようになった。奉公人宿にいれば、一日につき一升の米代は、降っても照っても、食う以上は支払わねばならず、日数がたつほど、後には布子も食費分に取られ、奉公先がきまれば、給金の前渡し金から、宿代を差し引かれ、十匁で一匁の口銭を取られ、着のみ着のままで出て行ったが、一人として裸で奉公した者もいない。たとえ奉公先がなくて、遊んでいても、侍の大小と同じで、流行り染めの袷一枚、大幅の絹帯一筋、木綿足袋に置き綿・差し櫛は、三日食べないで、ころりと死んでも、肌身離さず持っている。

（『西鶴織留』は、厳密には西鶴の遺稿集である）

近松門左衛門　承応二年（一六五三）～享保九年（一七二四）

本名・杉森信盛

浄瑠璃・歌舞伎の作者

代表作…『出世景清』『国性爺合戦』『曾根崎心中』『冥途の飛脚』『心中天の網島』『女殺油地獄』

写実的・町人のありのままの姿・葛藤・町人の情感の解放

義理・人情・沽券・心意気・男気・誠実さ・純粋さ・　愛・恋

金銭・経済社会・廓・遊女

心中の流行（封建制の中で）

「心中禁止令」享保七年

一、心中した男女の埋葬はゆるさない。

一、一人生き残りたる場合は下手人として打首。

一、両方生き残りたる場合は盛り場で三日間さらした上で、戸籍を削って非人とする。

『曾根崎心中』

■ **あらすじ（醤油屋の手代・徳兵衛と、遊女お初）**

・徳兵衛は叔父の平野屋（醤油屋）で奉公し、正直で誠実な美男子だと信頼されている。

・叔父は二貫目（一貫＝千匁）の持参金をつけて妻の姪を徳兵衛と夫婦にし、商売をさせようとする。

・徳兵衛には恋人・天満屋の遊女お初がおり、また主人筋の姪との結婚は沽券に関わると考え、縁談を断る。

・叔父は裏切られた思いで怒り、「持参金を七日以内に返し、大坂から出て行け」と激怒する。

・徳兵衛は物心（経済と人間関係）両面で基盤を失い、持参金も徳兵衛の田舎の継母に取られてしまう。

・徳兵衛は奔走し、二貫目を調達する。

・兄弟同然の親友、油屋の九平次にばったり会い、「たった一日必要だ、ないと倒産する」と頼みこまれ、三日の期限付きで証文を取り、調達した二貫目を「男気」で貸す。

・三日後、九平次に督促すると「借りた覚えはない」「証文の印鑑は、借りる前に落として届けを出したものだ」と言われる

・親友に罠に掛けられ騙されたと気付いた徳兵衛は、お初の目の前で、九平次ら五人を相手に組みかかり、こてんぱんにされ、あたかも騙りを働いた人間が、公衆の面前で打擲にあったようなかたちとなる。

・叔父の恩を裏切り騙りを働いたと見られ、社会的信用を失った徳兵衛は「男も立たず身もたたず」という全てに行き詰まった状態になる。

・周りの人々から徳兵衛の悪い評判を聞かされ、心配するお初のところに、徳兵衛本人が会いに来る。

・二人は人がいない隙に会うが、他の人々が戻り、お初は着物の裾に徳兵衛を隠して縁の下に連れ出す。

・そこにたまたまやってきた九平次が、徳兵衛は騙りだ犯罪者だといっているのを、徳兵衛は縁の下で聞く。

・お初は九平次の前で、自分の足下の縁の下の徳兵衛に向かい「死んで恥をそそごう」と言う。徳兵衛はお初の足を自分の首に当て、自害することを知らせる（身体化）。

・灯りが消え真っ暗な中、二人は家を抜け出し、曾根崎天神の森に向かう（道行き）。　疎外され、愛を全うするために死地に赴く（心中）。

・人魂が飛び交う森の中で、連理の枝に互いの身体を二重三重に縛り、「世に類なき死様の手本とならん」と決意を固め、来世での恋愛成就に賭け、徳兵衛はまずお初を剣で刺す。ためらい刃が何度もそれるが、最後に差し通し、断末魔の苦しみを見届ける。

・次に徳兵衛は、自身を「柄も折れよ刃も砕けよ」という勢いで力をこめてえぐり、しだいに弱り、明け方に息絶えた。

■　忍んで来た徳兵衛

表を見れば、夜の編笠、徳兵衛。思ひ詫たる忍び姿、ちらと見るより飛び立つばかり。走り出でんと思へども、お上には亭主夫婦、上り口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければさもならず。

「アヽいかう気が尽きた。門見て来う」とそつと出で、「なう、これはどうぞいの。こな様の評判、いろ／＼に聞いたゆゑ、その気遣ひさ、気遣ひさ、気違ひのやうになつてゐたわいなう」と、笠の内に顔さし入れ、声を立てずの隠し泣き、あはれ。せつなき涙なり。

男も涙にくれながら、「聞きやる通りの巧みなれば、言ふ程おれが非に落ちる。そのうち四方八方の首尾はぐわらりと違うて来る。もはや今宵は過されず。とんと覚悟を極めた」と。囁けば、内よりも、「世間に悪い沙汰がある。初様内へはひらんせ」と、声々に呼び入るる。

「オウ／＼あれぢや。何も話されぬ。わしがするやうにならんせ」と、裲襠の裾に隠し入れ、はふ／＼中戸の沓脱ぎより忍ばせて。縁の下屋にそつと入れ、上り口に腰打ち掛け、煙草引き寄せ、吸ひつけて、そ知らぬ顔してゐたりけり。

■　死の覚悟を伝え合う二人

初は涙にくれながら、「さのみ利根にいはぬもの。徳様の御こと、幾年馴染み、心根を明かし明かせし仲なるが。それは／＼いとしぼげに、微塵訳は悪うなし。頼もしだてが身のひしで、騙されさんしたものなれども、証拠なければ理も立たず。此上は徳様も、死なねばならぬしななるが、死ぬる覚悟が聞きたい」と、独言になぞらへて、足で問へば、打ちうなづき、足首取つて咽笛撫で。自害をするとぞ知らせける。

「オヽそのはず。そのはず、いつまで生きても同じ事、死んで恥を雪がいでは」といへば、九平次ぎよつとして、「お初は何を言はるるぞ。何の徳兵衛が死ぬるものぞ。もし又死んだらその後は、おれがねんごろしてやらう。そなたも俺に惚れてぢやげな」といへば、「こりや忝かろわいの。わしとねんごろさあんすと、こなたも殺すが合点か。徳様に離れて片時も生きてゐようか。そこな九平次のどうずりめ。阿呆口を叩いて、人が聞いても不審が立つ。どうで徳様一所に死ぬる。わしも一所に死ぬるぞやいの」と。足にて突けば、縁の下には涙を流し。足を取つて押し戴き。膝に抱き付き焦れ泣き、女も色に包みかね、互ひに物は言はねども。肝と肝とに応へつつ、湿り。泣きにぞ泣きゐたる。

人知らぬこそ哀れなれ。九平次も気味悪く、「相場が悪い、おぢやいの。ここな妓衆は異な事で。俺らがやうに金遣ふ大尽は嫌ひさうな。阿佐屋へ寄つて一杯して、ぐわら／＼一歩を撤き散らし。そしていんだら寝よからう、アヽ懐が重たうて。歩きにくい」と、悪口だらけ言ひ散らし、わめいてこそは帰りけれ。

■　お初徳兵衛道行

此世の名残り。夜も名残り。死にに行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜。一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の。鐘の響の聞き納め。寂滅為楽と響くなり。鐘ばかりかは。草も木も。空も名残りと見上ぐれば。雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川。梅田の橋を鵲の橋と契りて、いつまでも。我とそなたは女夫星。必ず添ふと縋り寄り。二人が中に降る涙、河の水嵩も増さるべし。

向ふの二階は。何屋とも。おぼつか情最中にて。未だ寝ぬ灯影、声高く。今年の心中善し悪しの。言の葉草や。繁るらん。聞くに心もくれはどり、あやなや昨日今日までも。よそに言ひしが、明日よりは、我も噂の数に入り。世に歌はれん、　歌はば歌へ、歌ふを聞けば。「どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬ者ぢやと思へども。」げに思へども嘆けども、身も世も思ふままならず。いつを今日とて今日が日まで。心の伸びし夜半もなく。思はぬ色に、苦しみに。「どうした事の縁ぢややら。忘るる暇はないわいな。それに振り捨て行かうとは、やりやしませぬぞ、手にかけて。殺しておきて行かんせな。放ちはやらじと泣きければ」

「歌も多きに彼の歌を、時こそあれ今宵しも、歌ふは誰そや聞くは我。過ぎにし人も我々も、一ツ思ひと縋り

付き、声も惜しまず泣きゐたり。　いつもはさもあれこの夜半は、せめてしばしは長からで、（ココカラ↓）心も夏の夜のならひ、命を追はゆる鶏の声。明けなば憂しや天神の。森で死なんと手を引きて、梅田堤の小夜烏、明日は我身を。餌食ぞや。

「誠に今年はこな様も、二十五歳の厄の年、わしも十九の厄年とて。思ひ合うたる厄祟り、縁の深さのしるし しかや。神や仏にかけ置きし、現世の願を今ここで、未来へ回向し、後の世も、なほしも一つ蓮ぞや」と、爪繰る数珠の百八に、涙の玉の。数添ひて、尽きせぬ。哀れ、尽きる道。心も空も。影暗く、風しん／／たる曾根崎の、森にぞ。辿り着きにける。

■　二人の死

「いつまでいうて詮もなし。はや／／殺して／／」と、最期を急げば「心得たり」と。脇差するりと抜き放し。「サア只今ぞ。南無阿弥陀、南無阿弥陀」と。いへどもさすがこの年月、いとし、かはいと締めて寝し。肌に刃があてられうかと。眼も暗み、手も震ひ、弱る心を引き直し。取り直しても猶震ひ、突くとはすれど、切先はあなたへ外れ、こなたへ逸れ。二三度ひらめく剣の刃。「あつ」とばかりに咽笛に。ぐつと通るが、南無阿弥陀、南無阿弥陀、南無阿弥陀仏」と。くり通し、くり通す腕先も。弱るを見れば、両手を延べ。断末魔の四苦八苦。哀れといふもあまりあり。

「我とても遅れうか、息は一度に引き取らん」と。剃刀取つて咽に突き立て。柄も折れよ、刃も砕けとえぐり。くり／／目もくるめき。苦しむ息も暁の、知死期につれて絶え果てたり。

誰が告ぐるとは、曾根崎の森の下風音に聞え。取り伝へ、貴賤群集の回向の種。未来成仏疑ひなき、恋の。手本となりにけり。

大阪・露天神社境内『曽根崎心中』徳兵衛とお初の慰霊像

Wikimedia Commons（Suguri_F）

参考文献

前田金五郎　訳注　『西鶴織留』角川文庫（一九七三年）

原道生　著　『鑑賞日本の古典　近松集』（一九八二年）

近松門左衛門　著『近松浄瑠璃集』有峰堂（一九一二年）

Sachiko Iwabuchi ≒ Sonezaki Shinju≒ University of Virginia(1999)